



日本文法  
大辞典

松 江苏工业学院图书馆  
藏书章

明治書院

日本文法大辞典

© Akira Matsumura 1971

昭和46年10月15日 初版発行 定価 12,000円

平成8年8月20日 13版発行 (本体11,650円)

編者 松 村 明



発行者 株式会社 明治書院

代表者 三 樹 讓

印刷者 大日本法令印刷株式会社

代表者 田 中 忠

発行所 株式会社 明治書院

東京都千代田区神田錦町1-16 郵便番号 101

電話(03)3292-3741(代) 振替 00130-7-4991

ISBN4-625-40055-4

# あ

## あいだ(間)

①接続助詞的に用いられる語

に接続する(ただし、多く補助動詞として使われる場合)。例病気のため欠席致し候間、お届け申し上げ候

意味 理由を表わすのに用いられ、「……ゆえに」「……から」といった意味を表わす。現代語として用いられる場合は、書簡文などの候文体に限られる。例御送り申し上げ候間、御納受下されたく候/事情かくのごとくに候間、御賢察のほど願ひ上げ候

補説 体言「間」が接続助詞的に用いられたと見られる用法は、すでに古く中古の変体漢文にある。例東宮雜事不閑間、可然冷旨等未下(御堂関白記・寛弘八年六月十三日裏書)/内大臣世間不穩之間、如此事相遇、御祈可候也(後二条師通記・寛治四年十月七日裏書)これらの「間」が、すでに接続助詞的と見られ、さらに、「相如年来文君ニ心ヲ係タル間カク会ハレ喜ハ心无ク限テシ文君ヲ攝キ抱テ密ニ出ヌ」(今昔物語・一〇の二六)「多ノ兵ヲ以テ頼時ヲ責ル間頼時力ヲ發テ防ギ戦フ事二日」(同・二五の二三)などの例を

## あいだくあかす

あげることができ(峯岸明「今昔物語集における変体漢文の影響について」『国語学』三六号)。接続も、右にあげた『今昔物語』の例や、「あまりに申しすむむの間、か様に見参しつ」(平家物語・祇王)「マウシケルアイダ」(日葡辞書)などに見られるように、「候」以外の動詞あるいは補助動詞の連体形に広くわたっている。↓あひだ (倉持)

## アオリスト(aorist)

ギリシア語の動詞に關係する時制の一つ

で、原義は「限定されざる」といった意味。動詞がアオリストの形をとって現われると、その運動が継続的にでもなく完了的にでもなく、(どちらとも限定されないで)そのまま全体的にとらえられていることを示す。ただし、直接法では、通常、このようにとらえられた過去のできごとをたんに報告するような場合に用いられる。同一動詞語幹を含む「不完了過去形」とアオリストでは、前者が、過去のできごとを継続的にとらえるのに対し、後者が、そういうできごとがあったという点でちがうわけである。なお、アオリストという術語は、完了形にも対立するものとしてつくられたものだが、完了形自身の意味が時代とともに変化したので、古代ギリシアのあらゆる時期にアオリストが現在形、不完了形、完了形と対立していたというわけではない。日本語では、「……した」が訳としたい適当である。(湯川)

## あかし(明し)

①「ク」あかるい。下二段動詞「明く」の形容詞形。

「赤し」と同源。例日月は明し(安可之)といへど吾が為は照りや給はぬ(万葉集・八三)／月いと明(ゆ)ければ、格子などもおろさで、念じ思ふほどに(蜻蛉日記・中) (山口佳)

## あかし(赤し)

②「ク」赤い。「明し」と同源。例君の御代御代隠さはぬ赤き(安加吉)心を皇辺に極め尽して仕へ来る(万葉集・四六五) (山口佳)

## あかす(明かす)

③「四」朝を迎える。明らかにする。「あく(明く)」(下二)に対する他動詞。

用例 ④ころもでにふれる涙の色見むと明かさば我もあらはれねとや(平中物語・二五) ⑤夏草のあひねの浜の蠣貝に足踏ますなあかし(阿加斯)て通れ(古事記・歌謡)／海原の沖辺にともし漁る火はあかし(安可之)てともせ大和島見む(万葉集・三五〇) ⑥野をなつかしみ明かいつべき夜を惜しむむかめる人も身をみつめて心苦しうなむ(源氏物語・真木柱) ⑦橋の上、対の簀子などに皆うたたねをしつつ、はかなうあそびあかす(紫式部日記)／かく胸ふたがりて明かすらむとはおほしなむや(源氏物語・総角) ⑧なに事をはなよ竹のよ長きには思ひあかす(平中物語・二二)／こころひとり明かす夜、かかる音のせぬはものたすけにこそありけれとまでぞきこゆる(蜻蛉日記・下) ⑨賀茂川の瀬

にふす鮎の魚取りて寝てこそあかせ夢に見えつや〔大和物語・七〇〕／起きながらあかせる霜のあしたこそまされるものは世になかりけれ〔和泉式部日記〕

(鈴木英)

あからし(懸し)

〔形〕〔シク〕痛切である。〔例〕アカラシク〔日本霊異記・上〕

記・上)

あく(明く)

〔動〕〔下二〕朝になる。新年自動詞。後世は一段化して「あける」となった。〔例〕(安気)暮居り明しも今宵は飲まむほととぎす明け(安気)む朝は鳴き渡らむそ(万葉集・三六〇)／天の原ふりさけ見れば夜そ更けにけるよしあやし独り寝る夜は明け(安気)ばあけぬとも(同・三五三)②ぬばたまの夜は明け(安気)ぬらし多麻の浦にあさりする鶴鳴き渡るなり(同・三五九)③暮ると明くとめかぬ(目ガ花カラ離レナイ)ものを梅の花いつのか人まにうつろひぬらむ(古今集・三〇)④ぬばたまの夜見し君を明くる(安久流)朝逢はずまにして今を悔しき(万葉集・三五九)⑤又逢坂の関はこえなむとて、明くれば尾張の国へ越えにけり〔伊勢物語・六九〕／殿の御方へ侍ふ人々と物語しあかしつつ、あくればたちわかれしつつかまかでしを思ひ出でければ〔更級日記〕

出でければ〔更級日記〕

(鈴木英)

あく(開く・明く)

〔動〕〔四〕(自動)・〔下二〕(他動)ひらく。ひらくようにする。下二段活用は奈良時代から用

いられているが、四段活用は平安時代になってから用いられるようになった。

〔例〕①四段活用(自動詞)。(安)あこぎいかでこの御文奉らむと握り持ちて思ひありくに、更に部屋の内あかず、わびしと思ひ思ふ〔落窪物語・二〕②たてこめたところの戸、すなはちただあきにあきぬ〔竹取物語〕③その後あるじは帰つて器物のごとくあいたを(定)見て「さても不思議ぢや」と〔天草本伊曾保物語〕④ものいみも今日ぞあくらむと思ふ日なれば、心あはたたく思ひつつ〔蜻蛉日記・中〕／家、入れ物などがあく(定)〔日葡辞書〕⑤上は年月の胸あく心地し給ひて御帳御几帳の帷子をはじめ、女房下仕への装束に至るまでつくろひたて給ふ〔浜松中納言物語・二〕

②下二段活用(他動詞)。(天)さがる鄙に月経ぬしかれども結びてし紐を解きも開け(安気)なく〔万葉集・三五九〕⑥わが思ひを人に知るれや玉匣開きあけ(阿気)つと夢に見ゆる(同・三九)⑦皆人々しつまりぬるをりに、典薬鐘を取りて来てさしたる戸あり〔落窪物語・二〕⑧あくるまで(夜)があくるまで「ト戸をあくるまで」トロカケテイル)試みむとしつれど、とみなる召使の来あひたりつればなむ〔蜻蛉日記・上〕／錠あけて遣戸あくるに、いとかたければ立ちあひるるぐ程に〔落窪物語・二〕⑨悪しう明くれば、障子などもごほめかしうほととぐこそしるけれ〔枕草子・にくきもの〕⑩妻戸口に

立ちて「とくあけ、はや」などあなり〔蜻蛉日記・下〕▽下二段活用は、のち一段化して「あける」となった。↓あける (鈴木英)

あくどし

〔形〕〔ク〕くどい。近世以降「あくどい」(灰汁)と関係あるか。例ちつとあくどく天麩羅か、まぐるのさしみで油の乗つた挨拶が聞きてえの(人・梅曆・初)

〔動〕〔下二〕とさざれていたものをひらく。「明く」(下二)が一段化してできた語。

あける(明ける)

〔動〕①ドレちつと障子をあけよふ(人・梅曆・初)②夜が明けてもいゝはな(滑・膝栗毛・初)／中より石の唐櫃をほりだしあけて見ければ〔黄・莫切自根金生木〕③ホンニそふしなさいましトあま戸をあける〔滑・膝栗毛・二〕④夜のあけるを待ちかね帰る(黄・莫切自根金生木)⑤笑ひながら湯屋の障子をあければ……ぐわらりととづれて倒るゝを構はず(人・梅曆・三)⑥店を明(る)と追出されるでござりませう〔滑・膝栗毛・発端〕

あさし(浅し)

〔形〕〔ク〕表面から底までの距離が短い。例とくとおもふふねなやますはわがためにみづのころるあさきなりけり〔土左日記〕

あし(悪し)

〔形〕〔シク〕わるい。普通、連体格は「あしき」であるが、稀に「あしかる」を用いた例がある。例筑波嶺

に背向に見ゆる葦穂山あしほ悪あくしかる(安志可流) 咎もさね見えなくに〔万葉集・三九〕／難波がたしげりあへるはきみがよにあししかるわざをせねばなるべし〔拾遺集・五六〕／極熱に酒は悪しかる者をとて〔源平盛衰記・四五〕また、終止形に「あしし」を用いた例がある。〔圓君の顔色あしし〕、おそらくは鬼神にをかされたる歎〔続古事談・五〕／二ツノ事トモアシシト云ヘドモ〔論語抄・二〕 (山口佳)

あす

④助動 尊敬の助動詞「やす」が成立する際に生じた一語形であって、語源は「あそはす」にある。「あすはす」の下略形となっている。近世の上方に行なわれた特色のある待遇表現の一つで、用例は少ないが「す」を語末にもつ敬語群の中の注目すべきものである。

〔活用〕「やす」に比べて活用はきわめて乏しい。連用形がわずかに見当るだけである。〔又〕きふもお前の留守にひよこひよこと来あして……ぶつくさ言ふて帰りあした〔浄・傾城二河白道〕

〔接続〕動詞の連用形につく。

〔意味〕相手の動作について尊敬の意を表わす。「……なさる」。〔例〕思はずそなさんに逢ひあしたも浅からぬのりの御縁〔浄・愛染明王影向松〕

アスペクト (aspect)

事物の運動はどのような運動形態のもの

(吉田)

あす～あすま

でも一定の時間内に位置を占めるものである。そして、人間は、たとえば、その運動を時々刻々変化する過程に注目しながら認識することもできるし、そうした過程を捨象してあたかも一時点におこったものであるかのごとく全体を統一的に認識することもできるし、その運動が残す結果の面からその運動を認識することもできる。このような、運動についての認識のしかたの差異は、人間の認識自体をいくつかにはっきり区分するといったものではなくて、多分に相対的な差異なのであるが、こうした差異が文法的な形をとって言語に反映されることもある。その主な形態としては、動詞がいくつかの下位範疇にわかれ、かつ、一つの下位範疇に属するどの動詞にも原則として他の下位範疇に属する意味的、音形的に対応する動詞が存在するといったもの、あるいは、その対応関係をもっとはっきりと表現している形態として、同一動詞語幹に上述の認識論的差異に対応する複数個の接辞のどれかが付着するといったものがありうる。このように、上記の認識論的差異が文法的事実を生み出している場合、この文法的事実をアスペクトと呼ぶ。印欧語では、たとえば古代ギリシア語の三つ、ロシア語の完了・未完了の二つのアスペクトが知られているが、両者とも上述の形態のうちの前者に属する。しかし、こうした認識論的差異が必ず、対応する文法的事実を生み出さなければならぬものでもないし、他

の認識論的差異(時の問題、運動の過程のどの部分をとらえるかといった問題等々)から切り離された形で対応する文法的事実を生み出さなければならぬものでもない。(湯川)

東鑑体

がみたまか 吾妻鏡体とも書く。日本語の文章を、その用語の性質

と記載様式からみた場合の分類の一つ。変体漢文・和化漢文に与えられた別名。すなわち、すべて漢字をもってつづられており、一見漢文のようであるが、必ずしも漢文法によらないで、日本語としての語序によったり、漢文には用いない俗語や記録体に特有な「云々」「了」「者」のような文末語を用いる等の特色をもっている。変体漢文(和化漢文)は、すでに奈良時代から見うけられ、平安時代にも『日本霊異記』『中将記』など多いが、わけでも『御堂閔白記』『中右鑑』(鎌倉幕府の事蹟を日記体に編述、五二巻)がその典型と考えられる形態を示しているので、代表として東鑑体とよぶのである。したがって広義に変体漢文(和化漢文)とよべば、七世紀初期の法隆寺薬師仏光背銘にみられる特殊な敬語法や『古事記』中の特定の措辞も東鑑体となるが、定型化したのは記録体の変遷の中でであるので、普通は漢文記録体の一種とする。「一日庚申蒲冠者範頼主蒙御気色」是去年冬為征木曾上洛之時於尾張墨俣渡依相争先陣与御家人等一闘乱之故也其事今日聞食之間朝敵

追討以前好私合戦太不<sub>二</sub>穩便<sub>一</sub>之由被仰云々」  
 「東鑑・寿永三年<sub>二</sub>元暦元年二月<sub>一</sub>」のような文体  
 であって、江戸時代の男子書簡文などもこの形  
 態をひいている。→変体漢文 (林)

## あそばす(遊ぶす)

④動(四)動詞「遊ぶ」に、上代の尊敬の助動詞「す」(四段型)のついた連語であるが、中古以降は一語の動詞として使用された。したがって、「お遊びになる」が原義であり、「遊ぶ」に「遊蕩する」「音楽をする」などの場合が多いので、自然、それらの動作主を敬っている尊敬語として用いられる。また、他動詞として「……を遊ぶす」の形で使用されるが、この場合にも、その対象となるものは、多く音楽・射芸・詩歌など、遊芸に関する事柄に限定される傾向があるようで、上代・中古の使用場面は、「意味・用法」の①に示すようなものに近い限定できそうである。さて、「遊ぶ」の内容の拡大によって、「遊ぶす」もその使用範囲の広がっていった傾向は①の用例にも認められるのであるが、さらに広がると、徐々に、たんに「する」の尊敬語へと移って行く。その時期は、中世ごろからであったろうか、①の範囲にははまらない、②のような諸例が現われて来る。そして、このころ(『平家物語』など)から、「遊ぶさる」のように「る」を伴ったものも現われる。さらに、近世にはいはって、補助動詞としての用法も現われ、上品なお屋敷ことばとして、

いわゆる「あそばせ詞」が発達する。たとえば、『浮世風呂』などにも、お屋敷奉公の経験のある嫁のことは頻出し(二編下)、また「人がらよきかみさま水舟のわきにて小桶に水をくみみる。これはそらおがみへ見セカケタケテ寧ニスル」にて詞づかひもあそばせづくしなり(三上)とばでは「あそばす」の形にもなっている。一方、公家、武家の家庭ばかりでなく、東西の遊里でも用いられたことを、吉田澄夫は「難波鉦用語考」(『近世語と近世文学』)で、『聖遊廓』『遊子方言』の用例とともにあげて述べている。【意味・用法】①「遊ぶ」の尊敬語として、自動詞的にも、また、目的語をとって他動詞的にある限定された「遊び」をなさるの意にも用いられる。上代・中古を中心におもな使用場面で分類してみるとおおよそ次のようになる。①遊蕩なさる。例やすみしし我が大君のあそばし(阿蘇婆志)し猪の病猪の「古事記・歌謡」刺楊根張り梓を大御手に取らし給ひてあそばし(所遊)我が大君を(万葉集・三三四)②(国見を)なさる。これは他に類例がなく判断しにくい、国見行事が歌舞などの要素を伴うものであったため「遊ぶす」が用いられたのか、あるいは「国見をし、そして遊ぶし」のように分解して解すべきもので、戸外に遊楽なさる、歌舞などなさる、の意か。例遠つ人松の下道ゆ登らして国見あそばし(所遊)「万葉集・三三四」の音楽をなさ

る。また、楽器を演奏なさる。例恐し、我が天皇、猶其の大御琴あそばせ(阿蘇婆勢)「古事記・中」かの姫君琵琶あはせて遊ぶしし、うけ給はりしに、世間の事こそ思はえざりしか(宇津保物語・初秋)僧都、琴をみづからもて参りて、これただ御手ひとつあそばして、同じうは山の鳥も驚かし侍らむとせちに(源氏三)聞こえ給へば(源氏物語・若紫)／(姫君タチ)人聞かぬときは、あけくれかくなむあそばせど(彈奏ナサルケレド)、しも人にくてもみやこの方より参りたちまじる人侍るときは音もせさせ給はず(同・橋姫)③弓を射たて、みな君達御たらし(弓ノ尊敬語)遊ぶすほどに(宇津保物語・初秋)／ことにあそばし当てむ(射当てむ)ノ尊敬語ノ心もなく、ただ鳥立つまじとばかりの程に心して遊ぶ(同・初秋)ノ帥殿の、南殿にて人々集めて弓あそばししに(鞍射フナサツタ折ニ)「大鏡・道長」ノ足助殿の御弓勢、日来承り候ひし程はなかりけり。こを遊ぶし候へ(太平記・三)④碁などをお打ちになる。また、双六をなさる。例天曆の御時、一条摂政藏人頭にて侍りけるに、帯を賭けて(帝ガ)御碁あそばしける、負け奉りて(拾遺集・五詞書)／「ひさしく双六つかまつらで、いとさうざうしきに、けふあそばせ」とて……。この御博突は、うちたせ給ひぬれば、ふたところながらはだかに腰からませ給ひて、夜中、あかつきま



であそぼす「大鏡・道隆」①詩歌などをお作りになる。お詠みになる。例帝「立田川紅葉みだれて流るめり……」とぞあそぼしたりける「大和物語・一五一」／上はこの頃は講師日々に参り御文遊ばす「詩文ノ勉強ヲナサル」。夜は夜更くるまで御手習せさせ給ふ「宇津保物語・国讓上」／これが返し「返歌」、いまひとたびせむとて、半まではあそぼしたなるを「末なむまだしき」とのたまふなる「蜻蛉日記・下」／この殿、

こととふれてあそぼせる詩・和歌など、居易・人丸・躬恒・貫之といふとも、え思ひよらざりけむとこそおぼえ侍れ「大鏡・道長」①絵をおかきになる。例あて、御あそぼしたりし、興あり「大鏡・伊尹」④文（手紙）などをお書きになる。例「御書を賜はつて向かひ候はん」と申しければ「まことに」とて（主上ハ）御書あそばいてたうだりけり「平家物語・小督」／手づからみづから御願文を遊ばいて、清書をは撰政殿せさせおはします「同・富士川」／御消息に……とあそぼされて候ふは、かの邪執をやめんがためなり「歎異抄」

②対象が広くなって、たんに「する」の意の尊敬語。「なさる」。例御手の裏をひるがへして法華経をあそぼす「へオ写シニナル」とて「問はずがたり・一」／御出家あるべしとて人数定められしにも、女房には東の御方、二条とあそぼされしかば「御指名ナサッタノデ」同・一」／勅進帳を遊ばされ候へ。これにて聴聞申さうする

### あそぼ

にて候ふ（答ニ「なに、勅進帳を読めとや」トアリ「読む」ノ尊敬）「誦・安宅」／けふより三日御つつしみ、御手もあそぼされず（手ヲウツコトヲイウ）、御みふささき有り「お湯殿の上の日記・貞享三年十二月二日」／毎年六月中はこぼんの土用干をあそぼしけるに「西鶴俗つれづれ・五」／おあぶなうございますよ、お静かに遊ばしませし「滑・浮世風呂・二」

③他の動詞につけて用いる。↓あそぼす（補助動詞）

【補説】①ロドリゲス『日本大文典』の「アソバス（Aobasu）」の条には、「尊敬せられる人がある事をしたたり、ある物を作つたりすることを意味する」と説明があり、一般的な「する」の尊敬語とみていいようであるが、引例についてみると「テヲアソバスは書くこと、フミヲアソバス、モノノホンヲアソバス、テホンヲアソバス、等も同じく書くこと、ユミヲアソバス、テツボウヲアソバスは、弓を射ること、また、鉄砲をうつこと、ウタヲアソバスは歌をつくること、ツツミ・タイコ・コト・ビヲアソバス、これらの楽器を奏すること、ミサヲアソバスはミサを誦すること、ウマヲアソバスは乗馬すること」のようにあって、これらの中に、古い用法の名残りをとどめているのではないかと思わせる使用傾向がうかがわれる『日葡辞書』は「アソバサレ、アソバサル」の項に「テヲアソバサル、ユミヲアソバサル、ウタヲアソバサ

ル、フミヲアソバサル」の例文がある。

②以上の敬語の「遊ばす」とは別に、同じく四段活用ではあるが、「遊ぶ」を、使役の意を持つサ行四段に活用させた「遊ばす」がある。「遊ばせる」の意。例（大将殿ハ）わが御殿にはぬ独住にて、君逢うちながめ、あそぼして、さうざうしくおぼさる「落窪物語・四」／をかしげなるちごの、あからさまにいだきて遊ばしうつくしむほどに「枕草子・うつくしきもの」／（若君ヲ）しばしなぐさめあそぼしていで給ひぬるさまの「源氏物語・東屋」／不断は手をあそぼして、足もとから鳥のたつやうに、ばたくさとはたらきてから、何の甲斐なし「浮・世間胸算用・四」（杉鶴）

### あそぼす

④動（四）（補助動詞）動詞「あそぼす」の「意味・用法」②の

意のものが他の動詞について「お……になる」「……なさる」の意を、より敬っていう言い方として用いられたもの。近世以降の用法で、江戸では「……あすばす」の形も用いられた。①動詞の連用形につく場合。連用形には接頭語「お」がつく。例こちらへおはいり遊ばせ「浄・菅原伝授手習鑑」／是をお浴遊ばせ「お上りあすばせ「滑・浮世風呂・二」／勝山にお髪をおあげさせ遊ばせして、さぞお美しからう「同・三」②動作性の漢語につく場合。それらにサ変動詞「する」がついてできる複合動詞を敬っていう尊敬語動詞を作る。この場合、漢語の上に



接頭語「御」のつくことがある。例伊左衛門様は流浪遊ばす〔浄・夕霧阿波鳴渡〕／あなたはいろいろ御苦勞あそばすだろうと〔人・仮名文章娘節用・六〕

あそぶ(遊ぶ)

〔動〕〔四〕好きなことをして楽しむ。音楽や舞をする。

〔用例〕①月に日にしかしへソノヨウニ遊ば(安蘇婆)ね愛しきわがせこ〔万葉集・四九〕②わが宿の梅の下枝に遊び(阿蘇毗)つつうぐひす鳴くも散らまく惜しみ(同・八四)③見に参つてあそんでをるならば、さんざんにせつかんいたさうずる〔狂・虎清本文になひ〕／表に子供と遊んでおりました(狂・虎寛本二人袴)④男はうけきはらず呼びつどへていとかしこくあそぶ〔竹取物語〕／夜一夜遊ぶ〔宇津保物語・蔵開上〕⑤梅の花折りかざしつ諸人の遊ぶ(阿蘇夫)を見れば都しぞ思ふ〔万葉集・八三〕／大原やせが井の清水ひさごもて鶏は鳴くとも遊ぶ(阿曾不)瀬を汲め遊ぶ(阿曾不)瀬を汲め(神楽歌)／遊ぶ事限りなし〔宇津保物語・蔵開上〕／あそぶかもめ水に住みて人になれたり〔大鏡・裏書〕⑥山川の清き川瀬に遊ぶ(安蘇倍)ども奈良の都は忘れかねつも〔万葉集・三二六〕⑦垂姫の浦を漕ぎつつ今日の日は楽しく遊ぶ(安曾敷)言ひ継ぎにせむ〔同・四〇七〕▽アソビ、アソブ、アソウダ(Asohi, u. oda)〔日葡辞書〕(鈴木英)

あだし(他し)

〔動〕〔シク〕ちがった。ほかの。古く「あだし」と清

音であった。上代には確実な例がなく存否不明である。平安時代には「あだし+体言」の形を取る、接頭語としての例が多く、シク活用の形容詞としての用例は本文に疑義がある。接頭語として、次のような例がある。例君をおきてあだし心をわが持たば末の松山浪も越えなむ〔古今集・二〇三〕／余(シ)舍利金塔観頂ノ幡等〔日本書紀・推古〕／異ナル県他(シ)山載チ千里ニ馳ス〔興福寺本大慈恩寺三蔵法師伝・延久頃点〕／明日知らぬ三室の峯の根無草何あだし世に生ひ始めむ〔千載集・二二六〕なお、一般の辞書に形容詞「あだし」として次の二つを挙げている。例露をだにあだしと思ひて朝夕に我がなでしこの枯れにけるかな〔栄花物語・本の雫〕／殿の御前の御声はあまたにまじらせ給はずあだし聞えたり〔同・玉の台〕しかし、『栄花物語』の最古の善本である三条西家本では、右の箇所がそれぞれ「露をだにあてじ」と「あなたくと聞えたり」とある。意味的にもこの方が落ち着くので、これらはいずれも形容詞「あだし」の確例とはなしたがたい。

あたたかし(暖し)

〔動〕〔ク〕〔シク〕冷たすぎも熱すぎもしない。

古くは、形容詞としては「あたたかし」、形容動詞としては「あたたかなり」を用いたが、後代「あたたかし」という形容詞が生じた。これにはク活用の形と、時にシク活用の形とがある。①ク活用。例あたたかき吉次が宿や子燈心〔新

類題発句集〕／アタタカクナル(和英語林集成)②シク活用。例コチラカタタカシウシナイタラ喜ンデ従フベキゾ〔史記抄・一一〕

あたらし(新し)

〔動〕〔シク〕今までにない。今までとちがう。

と、「あたら(新)」を語基とする形容詞で、「あたらし」であったのが、音の転倒を起こして「あたらし」となったらしい。①「あたらし」。例更ニ新(シ)シキ悪不善ノ業ヲ造ラ不ルマデニ心ニ厭倦无シ〔地藏十輪経・元慶点〕／あたらしき(阿良多之支)年の初めにかくしこそ千年をかねて楽しき終へめ〔琴歌譜〕／新アラタシキ(類聚名義抄)②「あたらし」。例あたらしき年の始にかくしこそちとせをかねてのしきを積み〔古今集・二〇六〕／春雨の世にふりにたる心にも猶あたらしく花をこそ思へ〔後撰集・志〕／かねてより御車あたらしく調じ〔落窪物語・二〕なお、終止形に「あたらしし」を用いた例がある。例新あたらしし〔落窪集〕

あたらし(惜し)

〔動〕〔シク〕おしい。例あたらしき綱花羅斯積

あつかふ(扱ふ)

〔動〕〔四〕世話をする。手であやつる。用いる。

処理する。平安時代から用いられた。①用例 ①ひと所おはせましかば、ともかくも、さるべき人にあつかはれ奉りて〔源氏物語・総

角) 何やかやと、もろ心にへ心ヲアワセテあつかひ給へるを「同・宿木」⑨内証手を入れ二百両まで扱へても足下見て千両でも聞かぬといふ「浄・山崎与次兵衛寿の門松」⑩命婦などは……など、うちささめきあつかふ「源氏物語・賢木」⑪すこしおとなしき程になりぬる齡ながら、あつかふ人へ世話ヲスル子供もなければさうさうしきを「同・澤標」▽なお、「扱へば」

の形で、仮定の意味に使われるものとして、次のような例がある。例金銀で扱へば百万両でも聞かぬ男「浄・山崎与次兵衛寿の門松」(鈴木秀)

あづかる(与る)

⑩勳「四」物事にかかわる。志や賞などを受ける。

「用例」⑩入学して今年廿余年、未ださうのねん(左右の念)カにあづからず「宇津保物語・祭の使」/西方浄土の来迎にあづからんとおぼしめし「平家物語・先帝身投」⑪いやくし貧しきものもたかき世にあらたまり、宝にあづかり世にゆるさるるたぐひ多かりけり「源氏物語・若菜下」⑫宿願にまかせてつひに聖衆の来迎にあづかる「古今著聞集・二」⑬釈迦の御弟子は多かれどすぐれて授記にあづかるは迦葉須菩提や迦旃延目蓮よこれらは後世の仏なり「梁塵秘抄・二」⑭惜しまれ給へば、面目あれ、まかですとて無期の勘事にもあづかれ「勘気ニツレ」それによりて親兄弟の勘ぜられむこそいとやさしかるべけれ「宇津保物語・蔵開下」/故いかんとなれば……コンヒサン「告白」をつとむる

あづか／あはし

を以つてその不足をあひ達して御赦免にあづかれば也「どちりなきりしたん・国字本・一〇」⑮土佐に二歳になるいとけない者がござるを御不便にあづかれ「azucare」、と申せば「天草本平家物語・四」▽楚ノ天王ノ子芸等ガ謀反ニ与「カ」ル者「史記・孝景本紀・訓点」(鈴木秀)

あづかる(預る)

⑩勳「四」責任をもって

「用例」⑩これはしばしば賜はりあづからむ「源氏物語・若菜下」⑪此のたびはここに(私ガ)あづかり奉らむ「落窪物語・二」⑫しかるところにイソポ畑より帰られれば、かの柿をあづかつた「azucate」者ども思ふやうは「天草本伊曾保物語」⑬乗つて事にあふべき馬の候ひつるを、親しいやつめに盗まれて候ふ。御馬一匹くだしあづかるべうや候ふらん「平家物語・競」⑭凡そ敵を亡ぼす者は、半国を預る上、其の功世に絶えずとこそ承る「保元物語・中」⑮ひとつへのやうなれば、望みてあづかれるなり「土左日記」(鈴木秀)

あつし(熱し)

⑩形「ク」[シク]「温度が高い」の意で「あつし」と

いうク活用の語があるが、一方、「病氣が重い」の意で「あつし」というシク活用の語がある。後者は、病人が熱を出して苦しむのが原義で、前者から生じたと考えられる。①ク活用。②熱キコトモアラ不「地藏十輪經・元慶点」/御くしも痛く、身もあつき心地していと苦し

く「源氏物語・夕顔」②シク活用。③倭アツシク「金剛般若経集驗記・平安初期点」/いとあつしくなりゆきもの心細けに里がちなるを「源氏物語・桐壺」(山口佳)

あつし(厚し)

⑩形「ク」厚みが多い。④幸ひのあつき「阿都伎」輩

参到りて正目に見けむあとのとももし嬉しくもあるか「仏足石歌」(山口佳)

あつまる(集まる)

⑩勳「四」多くのものがある所に寄つて来る。

「用例」⑩八十余人未だ不集(あつまる)る間、僅に兵四百余人有て「今昔物語・二五の一」⑪いとよく侍るなりと人々集まりて喜び給ひて「宇津保物語・蔵開下」/集まりてとくおろさむとて綱を引きすぐして「竹取物語」⑫諸鳥一所に集つて「atsumate」言ふは「天草本伊曾保物語」⑬輝やく神遙かになりゆきて月のめぐりに星集るめり「宇津保物語・楼上下」/甲冑をよるひ、弓箭を帶し馳せ集る「平家物語・西光被斬」⑭わかき人人のそこはかとなく集まる所ぞ「源氏物語・紅梅」⑮上、中、下の人われもわれもと此の道に心ざし「大学ニ」集まれば「同・少女」⑯四つの蛇五つの兎の集まれる「阿都麻礼流」きたなき身をば厭ひ捨つべし離れ捨つべし「仏足石歌」(鈴木秀)

あはし(淡し)

⑩形「ク」薄い。④なごめなることだに少しあはき方を

に寄りぬるは、心とどむるたよりもなきものを

あはれあぶな

〔源氏物語・深櫻〕

あはれむ(哀れむ)

④勳「四」気の毒に思う。すばらしいと思う。

(山口佳)

〔用例〕⑧天これをあはれませられて (Aurum-xenarct) 柱を一本下さるれば「天草本伊曾保物語」⑩和上あはれみて「三宝絵詞・下」／巷にかうべをわたさるゝ今はあはれみかたしまずといふ事なし「平家物語・首渡」⑨昼夜に万民をあはれんで普賢の悲願に住す「同・高野」⑨女は春をあはれむといふことふるき人のいひをき待ける「源氏物語・若菜下」(阿里莫本による。)

他本は皆「あはれふ」／窮鳥懐に入。人倫これをあはれむといふ本文あり「平家物語・永倉議」⑨恐しき山ならねば泉の声をあはれむにつけても山中の景氣、折につけて尽くる事なし「方丈記」▽慨アヘム「類聚名義抄」 (鈴木英)

あひだ(間)

⑥名詞「あひだ」が形式名詞となり、接続助詞のように用

いられたもの。変体漢文・記録体などで用いられ、中世の『平家物語』などの和漢混消文によって一般化し、候文体の確立とともに、「候文」における代表的な接続助詞となる。中世においては、擬古的な和文脈系の文章にはほとんど用いられない。

〔接続〕①動詞・助動詞の連体形に接続する。②

(平忠盛へ郎等家貞ニ)かくともいはまほしう思はれけれども、いひつるものならば、殿上までもやがてきりのぼらむずる者にてある間、「別

の事なし」とぞ答られける「平家物語・殿上闈討」／山門の大衆いかが思ひ付け、先例を背て、東大寺の次、興福寺の上に、延暦寺の額をうつ

あひだ南都の大衆とやせましかうやせましと僉議する所に「同・額打論」／入道相国一天四海をたなごころのうちに握り給ひしあひだ世のそしりをもはばからず、人の嘲りをもかへりみす不思議の事をのみし給へり「同・祇王」／敵おほく法勝寺に籠よし聞えける間、をしかこみて探り求るに、寺中広博にして尋出しがたければ「保元物語・中」

②助詞「の」に接続する。④(新大納言成親へ)平治には越後中将とて、信頼卿に同心のあひだ既に誅せらるべかりしを小松殿やう／／に申て頭をつぎ給へり「平家物語・鹿谷」

〔意味〕理由・原因を表わす。「……ので」「……から」「……ゆえに」「……ために」。④けふの見参はあるまじかりつるものを、祇王がなにと思ふやらん、余に申すすむる間、加様に見参しつ「平家物語・祇王」／親父入道相国の躰をみるに、悪逆無道にして、ややもすれば君をなやまし奉る。重盛長子として、頻に諫をいたすといへども身不肖の間、かれもつて服膺せず「同・医師問答」／今日吉日にてある間、鐘を鐘楼へ上げ候へ「語・道成寺」／判官殿に似たと申す者の候間、落居の間止めて候「語・安宅」／西田井方御下地の事ハ、一りうも御年貢沙汰可申候やうも候はず候、此よしをれん／／なけき

申候へ共御免なく候間、所せん、西田井方御下地の事ハ、まいらせあげ候「大山莊市井谷百姓等申状・応永廿二年九月六日・東寺百合文書」 (西田)

あふ(会ふ・逢ふ)

④勳「四」出会う。対面する。

〔用例〕⑧春さらばへ春ニナッターラ逢は(阿波)むと思ひし梅の花今日の遊びにあひ見つるかも「万葉集・八豆」④ぬばたまの夜渡る月にあらませば家なる妹に逢ひ(安比)て来ましを「同・三三」④たのうだ人にあうて(原文「あふて」先度は紙をひきさいて、文を書いておこしやつたの「狂・虎清本文になひ)／以前の辛勞よりも猶大きな苦患にあうて(さ)身を知るものちや「天草本伊曾保物語」／あ(逢)つても逢はないでも、今夜遅くか翌の朝は早く帰つて来ませうから「人・清談和歌翠・九」④あふと見し夢になか／／暮されてへカエツテ恋シサガ増シテ「上」④うつつには逢ふ(安布)よしも無しぬばたまの夜の夢にを継ぎて見えこそ「夜ノ夢ニ毎夜見エテ下サイ」「万葉集・八三」④愚かにつたなき人も家に生れ時にあへば高き位にのほりおごりを極むるもあり「徒然草・三八」④はや会へとの給へば舟に行きてあひたり「源氏物語・明石」 (鈴木英)

あぶなし(危し)

④「ク」はらはらさせる状態である。④なにか

しらがまへには、あぶなくたつ奴ばら哉〔宇治拾遺物語・一八九〕  
(山口佳)

**あべかめり** ㊦ラ変動詞の連体形「ある」、推量の助動詞「べかり」の連体形「べかる」、推量の助動詞「めり」の連合して熟したるもの。「……あるようであるらしい」「あるようである」。

「あるようである」。例取分き聞えさせ給ふにつけても、人のそねみあべかめるを、いかで塵もす奉らじと語らふに〔源氏物語・若菜上〕／御いのりともなりて、ながくさかへおほしますにこそあべかめれ〔大鏡・伊尹〕／生けるかひなき有様にこそあべかめれ〔榮花物語・初花〕  
(吉田)

**あべかり** ㊦「あるべかり」↓「あんべかり」↓「あべかり」と変じてできたもの。ラ変動詞と推量の助動詞との連語である。存在の当然・可能性を推量している。

「……ありそなた」「……できそやに思われぬ」。

「晝暇なき折に、菊の露をかこちよせなどやうのつきなきいとなみにあはせ、さならでも、おのづから、げに後に思へば、をかしくもあはれにもあべかりける事の、その折につきなく目にもとまらぬなどを、推し量らずよみいでたる、なかなか心おくれに見ゆ〔源氏物語・帚木〕／すべて心に知れらむ事をも、知らず顔にもてなし、言はまほしからむことをも、一つ二つのふしは過ぐすべくなむあべかりける〔同・帚木〕」  
(吉田)

あべかゝあめり

**あべし** ㊦ラ変動詞「ある」に推量の助動詞「べし」のついたもので、「あるべし」の「る」の撥音化により「あんべし」となり、その「ん」を表記しなかったもの。古写本では「ん」があったりなかったりする。存在を推量する意を表わす。「……あるだろう」「ありそうだ」。例少納言の乳母といふ人あ(ん)べし。尋ねてくはしく語らへ〔源氏物語・若紫〕

／いでや今はかひなくもあべし事を、をこがましくあまりなおびやかし聞え給ひそ〔同・東屋〕／さて今宵もやかへしてむとする。いとあさましうからうこそあ(ん)べけれ〔同・空蟬〕▽平安時代に盛んになった語法で、主として会話文に使われる。  
(吉田)

**あまし(甘し)** ㊦甜阿万支〔日本霊異記・中訓釈〕

**あむ(編む)** ㊦動「四」糸や竹などで互いに組む。  
(山口佳)

〔用例〕㊦かいくぐりへカチグリをあみたてて(一本では「足たてて」となっている)〔蜻蛉日記・上〕㊦すだれを編む(ann)〔日葡辞書〕／経を編む(ann)〔同〕㊦竹編める垣しわたしたに石の階、松の柱おろそかなるものから珍らかにをかし〔源氏物語・須磨〕▽編阿万〔日本霊異記・中〕／編アム〔類聚名義抄〕  
(鈴木英)

**あめり** ㊦ラ変動詞「あり」の語幹「あ」に推量の助動詞「めり」のついた

もの。「あるめり」↓「あんめり」↓「あめり」の経過で変じた。

〔活用〕未然形と命令形以外は存するが、連用形は用例が少ない。例㊦そこなりし人の、さることあめりと教へしをなんととききし〔宇津保物語・俊隆〕／さしもおぼされぬ事もなきけなげしう聞えなし給ふ事どもあめり〔源氏物語・蓬生〕㊦聞きにきき事などうちまますまじうはたあめるを、遂にはさやうのことなくしてしもえあらじ〔同・宿木〕／かれ見給へ。かかる見えぬ者のあめるは〔枕草子・おなじこと〕㊦たへがたくとも、わが宿世のおこたりにこそあめれなど、心をちちに思ひなしつつ〔蜻蛉日記・上〕

／思ひ捨てがたき筋もあめれば、今いと疾く見なほし給ひてむ〔源氏物語・明石〕

〔意味〕「ある」と断定することをやわらげて表現するもので、「……あるようだ」「……あるらしいと思われる」の意を表わす。例子にきふ「今はいとまあめるを、をのが親のかしこき事に思ひて教へ給ひて」と、ならはし聞えむ。ひき見給へ」と言ひて〔宇津保物語・俊隆〕／さるは明け暮れひざまづきありくもの、物しくてゆくにこそはあめれと思ふにも、胸さくる心地すいたうも馴れ聞え給はずあめる〔源氏物語・東屋〕／下衆の紅の袴着たる。この頃はそれのみぞあめる〔枕草子・鳥は〕

▽平安時代に栄えた口語「めり」の連語には、

「めり」の上には変活用形が来ることが多い。「なめり」「べかめり」「ざめり」「ためり」「はべめり」などある中に交じって、「あめり」も用いられているが、「あめり」は他の「なめり」「べかめり」などに比べてはあまり多くない。(吉田)

あやし(怪し)

◎「シク」不思議である。◎相思はずあるらむ君をあやしく(安夜思苦)も嘆き渡るか人の問ふまで「万葉集・四〇五」なお、終止形に「あやしし」を用いた例がある。例此寒風山中に分け入る事あやしし「小倉問答」(山口佳)

あやしむ(奇しむ・恠しむ) ◎「四」怪しいと思う。

◎「四」怪しいと思う。

【用例】◎あやしむを見てあやしませざる時はあやしみかへりて破るといへり「徒然草二〇六」◎おの〜あやしみて「同・二二六」/母あやしみて問ふ「三宝絵詞・中」◎其の時に家の女驚き恠むで、隣に行きてひそかに「かかる事なむある。いかなることにかあらむ」といひければ「今昔物語・二九の九」/シャント怪しうで(avaxide)言はるるは「天草本伊曾保物語」◎棺の内甚だ香し。皆驚きあやしむ「三宝絵詞・中」◎なほ誤りもこそあれとあやしむ人あり「徒然草・一九四」▽異アヤシム「類聚名義抄」(鈴木秀)

あやなし

◎「ク」筋が立たない。普通、連体形は「あやなき」であるが、稀に「あやなかる」を用いた例がある。◎岩千鳥あやなかるねは何故ぞなかつの浜の鳴かず待

ちなむ(兼輔集) / 岩千鳥あやなかるねは行末のなかつの浜の鳴かずもあらなむ「同」(山口佳)

あやふし(危し)

◎「ク」(シク)あぶない。もと、ク活用の語であつたが、中世になってシク活用も生じた。①ク活用。◎脆アヤシキ「松田本四分律行事鈔・平安初期点」/かぜなみのあやふければ「土左日記」◎シク活用。◎ことしあかのほうちやみかだりあやふしき事ども候しかば「平野よみかへりの草紙」なお、普通、連体形は「あやふき」を用いるが、稀に「あやふかる」の例がある。◎行末も今はあやふかる天変の現じ様恐しとぞ「延慶本平家物語・三末」(山口佳)

誤つた回歸 あやまつた 類推の一種。もともと正しい語形なのに、正しくないと考え違いをし、もとへ引きもどそうとして、かえて誤つた語形にしてしまうこと。音韻・文字・かなづかい・文法にわたって見られる。「びつたり」というところを「ヤングにピタタシのネダン」(「やっぱり〜やっぱし」の類推)、「いちじるしい」を「いちぢるしい」(同音の連呼の類推)、「ペートルベン」を「ウェー トーウェン」(外来語のべはウエだとの思いすごし)、などという場合がこれである。(加藤)

あゆむ(歩む)

◎「四」あるく。【用例】◎「まことや、法輪は程ちかければ月の光に誘はれてまゐり給へることもや」と、そなたにむかひてぞあゆませけ

る「平家物語・小督」◎ひさかたの天の梯建踐み歩美。天降り日ましし「続日本後紀・嘉祥二年」/二月午の日の暁に急ぎしかど坂のなからばかりあゆみし日は、巳の時ばかりになりけり「枕草子・うらやましげなるもの」◎二人同じ様に歩んで(avaxide)行くところに、「一人斧を見付けて「天草本伊曾保物語」◎あゆむともなく、とかくつくろひたれど、足も動かさずわびければ、せむかたたくて休み給ふ「源氏物語・玉鬘」/もし、あたりくべき事あれば、みづからあゆむ「方丈記」◎月のいと明きに川を渡れば、牛のあゆむままに水晶の割れたるやうに水の散りたるこそをかしけれ「枕草子・月のいと明きに」◎車の人々さわぎ立ちあゆめば、道をふさぎて更にやらねばはしたなくて「落窪物語・二」◎ま遠くの雲居に見ゆる妹が家につかからむ歩め(安由亮)吾が駒「万葉集・三〇」▽イ・歩アム「類聚名義抄」(坂梨)

あらし(荒し・粗し)

◎「ク」荒々しい。細かでない。◎大和をも遠く離れて石が根の荒き(安良伎) 島根に宿りする君「万葉集・三六八」この語は普通ク活用であるが、次のような語幹用法の存在から見ると、シク活用の存在が推測される。◎為むすべのたどきを知らに斯くしてや荒し(安良志)男すらに嘆き臥せらむ「万葉集・三六三」なお、『枕草子』の「祭のかへさ」の段で、三巻本では「うつき桓根といふものの、いとあらあらしくお

る「平家物語・小督」◎ひさかたの天の梯建踐み歩美。天降り日ましし「続日本後紀・嘉祥二年」/二月午の日の暁に急ぎしかど坂のなからばかりあゆみし日は、巳の時ばかりになりけり「枕草子・うらやましげなるもの」◎二人同じ様に歩んで(avaxide)行くところに、「一人斧を見付けて「天草本伊曾保物語」◎あゆむともなく、とかくつくろひたれど、足も動かさずわびければ、せむかたたくて休み給ふ「源氏物語・玉鬘」/もし、あたりくべき事あれば、みづからあゆむ「方丈記」◎月のいと明きに川を渡れば、牛のあゆむままに水晶の割れたるやうに水の散りたるこそをかしけれ「枕草子・月のいと明きに」◎車の人々さわぎ立ちあゆめば、道をふさぎて更にやらねばはしたなくて「落窪物語・二」◎ま遠くの雲居に見ゆる妹が家につかからむ歩め(安由亮)吾が駒「万葉集・三〇」▽イ・歩アム「類聚名義抄」(坂梨)

どろおどろしげに、さし出でたる枝どもなどおはかるに」とある「あらあらしく」の部分か、堺本・前田本では「あらしく」とあるのは、やはりシタ活用の存在を示すものか。(山口佳) あらたし(新し) (動) 彫 → あたらし (新し)

あらはす(表はす・現はす・顯はす)

(動)

隠れているものを、はっきり見えるようにする

〔用例〕 ⑤玉島のこの川上に家はあれど君をやさしみあらはさ(安良波佐) ずありき〔万葉集・公器〕 ⑥遠き代にかかりし事をわが御世にあらはし(安良波之) てあれば食國は榮えむものと

〔同・五七五〕 ⑦(ドコニイルカ算デ) 置きあらわいて御目にかかけませう(狂・虎寛本居杭) ⑧我、

今たなごころを合はせて、法の妙なる事をあらはす〔三宝絵詞・中〕 ⑨しりなる人びとは、(水中ニ) 落ちぬばかりのぞき、手打ち(綱ノ中カラ獲物が姿ヲ) あらはすほどに、天下見えぬものども、取りあげまて騒ぐめり(蜻蛉日記・中) ⑩そよやげに木隠れたりし山守をあらはす月もありけるものを〔源三位頼政御集〕 ⑪人に志をあらはせば必ず帰す(婦順スル) と言へり

〔平治物語・上〕 ⑫親しいをも疎いをも分たす、平等に笑ひ顔をひとにあらはせ(arauke)〔天草本伊曾保物語〕

あらはる(表はる・現はる・顯はる)

(動)

現われる。むきだしになる。「あらはす」に対

あらた(あらぶ)

する自動詞。

〔用例〕 ⑬月ごろいささかもあらはれざりつるものけ〔源氏物語・手習〕 ⑭神仏のあらはれ給へらむやうなりし御心ばへ〔同・蓬生〕 ⑮まことにこの物のけあらはるべく念じ給へ〔同・柏木〕 ⑯すべて何事につけても道みちの人の才の程あらはるる世になむありける〔同・少女〕 ⑰盗みほどのおもしろい事はないと思ひ、成人するに従うてのちには大盗人となつて、その罪があらはるれば(araurudaba)、守護の所に渡され

〔天草本伊曾保物語〕▽見アラハル〔類聚名義抄〕

／ほにあらはるる(araururu)〔日葡辞書〕のち一段化して「あらはれる」となつた。(鈴木英)

あらびる(荒びる)

(動) 上二 荒れる。荒れすさぶ。「あらぶ」

(上二) が一段化してできた語。

〔用例〕 ⑱四種物を生み給ひて、此の心悪しき子の心荒びるは(荒比留) 水、籠、埴山姫、川菜を持ちて鎮奉れと事教へ留し給ひき〔延喜式・祝詞〕／陸奥國(の) 荒びる(荒流備) 蝦夷等を討ち治めに任賜ひし大將軍〔続日本紀・宣命〕 ↓あらぶ

(鈴木英)

あらふ(洗ふ)

(動) 四 水、湯などでよくこれをおとす。

〔用例〕 ⑲御方(浮舟) をも頭洗はせ取り繕ひて見るに〔源氏物語・東屋〕 ⑳親のもとに衣をなむあらひにおこせたりけるを〔大和物語・四一〕

／しはすのつごもりにうへへのきぬを洗ひて手づ

から張りけり〔伊勢物語・四一〕 ㉑「水まぬらせよ」と宣へば、干飯をあらうてまぬらせたり

〔平家物語・泊瀬六代〕／禿筆(先ノスリキレタ筆) をあらうてそのしり(今ノ尾) に駈す〔洒・卯地臭意・跋〕 ㉒隠所近き所の池にて、家主の下人、ごぼうを洗ふ〔沙石集・六〕／イヤ、最前の鱸を手ねばなへノロマナノ者か洗ふと見えていかうおそい(狂・虎寛本鱸包丁) ㉓この河に朝菜あらふ(安良布) 児汝も我もよちをぞ持てるいで兒たばりに〔万葉集・三〇四〕 ㉔おきつかぜ吹きにけらしな住吉の松のしづえをあらふ白浪〔後拾遺集・二〇四〕／川波の黄金を揺ると見えつるは岸なる菊の洗ふなりけり〔夫木和歌抄・一四〕 ㉕其尻をあらへ〔宇治拾遺物語・一五〕

(鈴木英)

あらぶ(荒ぶ)

(動) 上二 乱暴をする。なれ親しまない。上一段活用

の「あらびる」は、この語の一段化したものである。

〔用例〕 ㉖島の宮上の池なる放ち鳥荒び(荒備) な行きそ君まさずとも〔万葉集・三三〕／みたたしの島をも家と住む鳥も荒び(荒備) な行きそ年かはるまで〔同・一八〕 ㉗筑紫船いまだも来ねばあらかじめ荒ぶ(荒振) 君を見るが悲しき〔同・丑亥〕／たくひれの白浜波の寄りもあへず荒ぶ(荒振) 妹に恋ひつつそ居る〔同・三三三〕

／天くだし遣はして荒ぶ(荒布留) 神どもをはらひむけ〔祝詞・出雲國造神賀詞〕 ↓あらび



る (鈴木英)

あらゆる

③ラ変動詞「あり」の未然形に可能・自発の意の助動詞「る」のつ

いたもの。鎌倉・室町時代によく用いられた。

【活用】受身の助動詞「る」の活用に準じて下二段活用の用例があるはずであるが、已然・命令形は見当たらない。

④こなたが踏まると聞いたに依つて、身も世もあられいで、駆け着けました【狂・虎寛本千切木】⑤かくてもあられけるよとあはれに見るほどに【徒然草・一一】⑥別れてはながらふべくもなかりしにあればあらるるうき身なりけり【新統古今集・三五九】

【意味】様態的な表現で、存在可能である意を表わす。「あり得る」と「存在することができる」「生きてゆける」などの意。④何と思し召す。身上ならねば、あられぬ思案が出る事でござる【狂・虎寛本連歌盗人】/母是を見て心もあられざりける儘に、馳而走出てもろももの社に詣てうめき叫び……【沙石集・七】▽打消形になつた例が多く、それらは不可能の意を表わす。慣用語として「あられもない」という言い方があるが、これも打消語がついている。(吉田)

⑤動【ラ変】存在する。この

⑥動【ラ変】存在する。この

⑦動【ラ変】存在する。この

⑧動【ラ変】存在する。この

⑨動【ラ変】存在する。この

⑩動【ラ変】存在する。この

⑪動【ラ変】存在する。この

⑫動【ラ変】存在する。この

⑬動【ラ変】存在する。この

⑭動【ラ変】存在する。この

⑮動【ラ変】存在する。この

⑯動【ラ変】存在する。この

⑰動【ラ変】存在する。この

⑱動【ラ変】存在する。この

⑲動【ラ変】存在する。この

⑳動【ラ変】存在する。この

㉑動【ラ変】存在する。この

㉒動【ラ変】存在する。この

㉓動【ラ変】存在する。この

㉔動【ラ変】存在する。この

㉕動【ラ変】存在する。この

ける霍はたけ鳥物思ふ時に鳴くべきものか【同・三三〇】④伊香保風吹く日吹かぬ日あり【安里】

と言へどあが恋のみし時なかりけり【万葉集・三三〇】⑤旅なれば思ひ絶えてもありつれど家にある【安流】

妹し思ひがなしも【同・三六〇】⑥あれをおきて人はあらじと誇ろへど寒くしあれ【安礼】

ば麻衾あしな引きかがふり布かたぎぬ有りのことごと服襲へども【同・六八〇】⑦草枕くさまくらゆるく君をさきくあれ【安礼】と齋いはい筥はこす多つあがとこのへに【同・元三〇】

⑧ある【四段】室町時代のころから、終止形と連体形が同形化し、四段活用へ移って行った。

⑨此の野は仔細さいしゆがあつて、きじも多しと申せども、その仔細はそんぜぬ事で御さあるが【狂・虎清本禁野】/子曰ク、弟子入ツテハ則チ孝アリ【論語抄・一】/そこに兵糧を入れた大きな荷があつたを(atan), イソポは「これを持たう」と言へば【天草本伊曾保物語】/じよさいはあんまいが遣るなよ【洒・多佳余宇辞】⑩狐ノワキニ白毛ガアル。其レヲアツメテシテ袋ハ大義ナ物ヂヤゾ【蒙求抄・七】/草生ヒ茂リテアル墳ノアル。コレハ俊寛僧都トテツイニ平家ノ進退ニテハテタル人ノ墓ナレバ【中華若木詩抄・下】/大伽藍の中に柱ただ一本あつて、その上に十二の在所がある【三三〇】天草本伊曾保物語⑪そんなれば、外に稽古きこもいらす、たゞ橋の上うへに後見ごみがひとりあればいゝ【滑・八笑人・三二】

▽現代語では「ある」を打消す場合は「ない」と言い、「あらない」という形は用いられない。

しかし、文献には「あらない」という形がわずかではあるが、みられる。⑫それ故、しら齒の首は、お齒黒くろつけて給はれと頼まれておじやつたが、首もこはいものではあらない【おあむ物語】/急く事はあらない。先づお敵立を一見と……【浄・心中宵庚申】ただし、『おあむ物語』の例は、「あらない」とあるのは弘化刊本であつて、それ以前の三種の写本では「あらない」とはなっていないという報告がなされている。

近松の場合も、田舎者らしいことばづかいとして創作したのであろうか。「あらない」が現実

に用いられていたかどうか、また、現実には用いられたとして、どのように位置づけられていたか、問題として残る。(鈴木英)

あり

⑤動【ラ変】補助動詞 元来四段活用動詞「ある(生)」をもとにして生じた。その変化の過程については各種の推定説がある。この後身、現代口語の存在・陳述を表わす「ある」は五段活用で、ラ変に活用したものは上代から中世までであった。

【接続】形容詞・一部の助動詞などの連用形につく。また助詞「に」「と」「て」につくか、その間に係助詞・副助詞を介してつく。

【意味】存在の意を表わす動詞としての用法以外のものは、陳述の意を表わす指定の助動詞的なものと見なすことができる。



①上下の語の接続の媒介として用いられて陳述の意を表わす。「のである」「である」「だ」。圓妹が家道近くあり(安里)せば見れど飽かぬ麻里布の浦を見せましものを(万葉集・三三)／(文ノ)まめやかなるやうにてあるも、いと思ふやうなれど(蜻蛉日記・上)／我ならで下紐とくは朝顔の夕影待たぬ花にはありとも(花テアッテモ)伊勢物語・三七)／齋宮の御きよまはりも煩はしくやなど、久しう思ひ煩ひ給へよ、わざとある御返りなくば情なくやとて、紫のにばめる紙に(源氏物語・葵)／秋風に声を帆にあげて来る舟は天の戸渡る雁にぞありける(古今集・三三)／玉に貫く花橋を乏しみしこのわが里に来鳴かずある(安流)らし(万葉集・三九四)／何とも思はずやありけむ(思ワナカッタノダロウカ)伊勢物語・三三)

②上接の語、すなわち動詞・形容詞を伴わず、それだけで単独に用いられ、存在をはなれた、他の具体的意味の代わりに用いられる。圓ありつる(取ッテ拾ッタ)小桂を、さすがに御衣の下に入れて大殿ごもれり(源氏物語・空蟬)／神さへ頂に落ちかかるやうなるは龍を殺さむと求め給へばあるなり(上記)ヨウナ事が起コルノデス(竹取物語)／玉くしげおほふを安み開けて行かば君が名はあれど(雖有)ヘアナタノ名ハ惜シクハアリマセンガ(わが名し惜しも)万葉集・三三)／みちのくはいづくはあれど(他ノ所ハ情趣ガナイケレド)塩釜の浦漕ぐ舟の綱手かなしも(古今集・二六六)

③「しもあれ」「こそあれ」という連語形式で慣用語的に陳述・強意を表わす。「時しもあれ」というのは平安時代の歌語であり、「程こそあれ」はまた「程こそありけれ」とも用いられて鎌倉時代の武士ことばであった。圓時しもあれ(折モ折、チウウドソノ時ニ)たのむの雁の別れさへ心散る頃のみ吉野の里(新古今集・三三)／人の心こそうたてあるものはあれ(イヤラシイモノダ)源氏物語・葵)／とのめりつかさこそなほをかしきものはあれ(オモモキガアルモノデアル)枕草子・正月一日)／者共走り寄り走り寄り、ここかしこに取り付く程こそあれ(取リツクヤイナヤ)落ち重なり落ち重なりつかみつく(保元物語・下)／其の儀ならば行き向つて奮ひ留め奉れやと言ふ程こそありけれ(言ッタチウウドソノ時ニ)雲霞の如くに発向す(平家物語・行沙汰)

④下に打消語「ず」「ぬ」を伴って否定的陳述を表わす用法が多い。「で(は)ない」「ない」。圓なかなか人とあらずは(不有者)人間デナクテ)酒壺になりてしがも(万葉集・三三)／これは、ものによりてはむるにしもあらず(ホメルノデハナイ)土左日記)／内のしつらひには言ふべくもあらぬ(言イヨウモナイ)綾織物に絵をかきて(竹取物語)／月見ればちぢに物こそ悲しけれわが身ひとつの秋にはあらねど(秋デハアリマセンガ)古今集・二九三)／むかし若き男けしうはあらぬ女を思ひけり(悪クナイ女ヲ思ッテイタ)伊勢物語・四〇)／さても心を留め給ふべくはこそあらめ、たはぶれにてもあるまじき事なり(留メラレソウニナイ事デアル)源氏物語・須磨)

〔変遷〕古今を通じて意味上の変遷はない。あるときは存在の動詞として用いられ、あるときは陳述を表わす指定の助動詞として用いられ、ときにはそのいずれともつかぬ、両様に解される用法もあって意味の起伏は各時代を通じてある。語形の上では古語としてはラ変活用を通じ、現代語としては五段活用をする。「あり」は上接語と融合して語形を変え、また他の助動詞に転ずることが多い。たとえば「寒く・あれ・ば」は「寒かれば」となり、「あはれ・に・あり」は「あはれなり」となり、「人・と・ある・べし」は「人たるべし」となり、「行か・ず・あら・む」は「行かざらむ」となり、「書く・べく・あら・ず」は「書くべからず」となるごとく。また「照る月の流るる見れば天の河出づるみなとは海にざりける(土左日記)の「ざり」は「ぞ・あり」の転約である。助動詞または連語の「けり」「なり」「たり」「たかり」「まじかり」「めり」「せり」「かかり」「しかり」などいずれも「あり」の上

に他の語がかぶさってできた語である。  
〔補註〕「あり」を指定の助動詞として取り上げたのは時枝誠記であるが、それよりさき、その陳述の意のあることを指摘したのは山田孝雄で

